

平成 25 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること)

独居の要介護高齢者が在宅療養生活を継続する為に行う
訪問看護師の臨床判断のプロセス

学位の種類： 修士 (看護 学)

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科 学域

学修番号 11894611

氏 名：横山 史子

(指導教員名：河原 加代子教授)

目的：独居の要介護高齢者に対して在宅療養生活の継続を目指し訪問看護師が行っている臨床判断のプロセスを明らかにすることである。

方法：事例研究デザインとした。対象者は、独居の要介護高齢者の継続訪問の経験があり多職種との連携や協働に対して経験が豊富な訪問看護師 8 名である。データ収集は、①訪問看護記録、②訪問看護師、療養者、介護支援専門員のそれぞれにインタビューガイドを用いた面接を実施した。分析方法は、分析 1：各事例の療養者のフェイスシートを作成、療養経過を時系列に記述し、訪問看護師が行った調整場面を抽出した。分析 2：訪問看護師、療養者、介護支援専門員へのインタビュー・データから逐語録を作成し、療養者の療養経過と看護師による調整場面に照らし内容を整理した。分析 3：藤内ら (2005) 枠組みを参考に訪問看護師による臨床判断のプロセスを抽出した。

結果：

- 1) 研究協力が得られた訪問看護ステーションは 4 施設、訪問看護師は全て女性であった。年齢は 20 歳代後半から 40 歳代前半、看護師経験は 10 年、訪問看護師経験は 6 年程度であった。療養者は男性 3 名、女性 2 名であり、年齢は 70 歳代前半から 80 歳代後半、要介護度は 1～5 の範囲であった。
- 2) 独居の要介護高齢者に対する訪問看護師の臨床判断のプロセスは、判断の根拠、判断内容、推論、問題の把握、看護行為、評価で構成されていた。
- 3) 各プロセスの特徴として
 - (1)判断の根拠、判断内容：療養者に関する情報と療養者のおかれている状況から今の生活状況が、療養者の健康にとってどの程度影響があるのかという内容であった。
 - (2)問題の把握：状況に対する療養者自身の受容の程度や認識、対処行動や在宅療養で療養者が求める健康レベルの確認と療養者の今の心理的状況を把握していた。
 - (3)推論：訪問看護師は、療養者の現在の状況がこのまま継続すると在宅療養生活に支障がでる可能性があるときに推論していた。訪問看護師が関わり始めて 3 か月以降になると療養者の心理的な状況をより深く推論していた。
 - (4)調整：訪問看護師は、①必要な治療を受けられる様に医療に繋げる、②インフォーマルな人的資源も巻き込み、支援者として協力してもらう体制作りを行う、③療養者にとって必要であり、かつ療養者が望むサービスであるかを査定する為に試行する、④在宅支援者間での役割分担をし、療養者への関わりを統一するであった。

考察：

独居の要介護高齢者は家族が同居している場合と比べて、生活パターンなどが主観的情報に偏りがちであった。療養者の生活状況は日々変化しており、訪問看護師はその変化や時間の経過と共に療養者との信頼関係を形成していた。療養者の過去から現在までの生活や暮らしを知る中で、療養者への認識を変え、療養者の思いの真実に近づける様な推論を行い、地域の資源を活用した調整をおこなっていることが明らかになった。